

教育相談活動における事例検討についての研究

—— カウンセラーのクライアントへのかかわり方の検討から ——

藤 土 圭 三

A case study for the counseling to the maladjusted child

—— to examine for the relationship of the client and counselor ——

Keiso Fujito

問 題

不適応とされて苦しむ子どもたちの指導法としての教育相談やカウンセリングを推進するための援助機能として、事例検討会がある。最近は多くの学校現場で事例検討会が導入され、頻回に開催されると聞く。教育相談活動に導入された事例検討会はカウンセラーの指導機能を向上するための機能である。一つは教育相談は基本的にカウンセラーとクライアントとの二者関係であるから、カウンセラーも当事者であり、経験の深いカウンセラーであっても自己側面については観察（感知）不能なところがある。それはカウンセラーが日常の生活体験の中で期せずして身につけたブラック・ゾーン（カウンセラーが意識出来にくい体験過程、それがカウンセリング関係に投影される）であり、それが事例検討会でのスーパーヴァイズ機能によって発見され、指摘されることである。これはカウンセラーの面接能力や治療機能を向上するための重要な情報源となる。二つ目はカウンセラーがどのようにクライアントにかかわっているか、その特徴についての検討である。ここで言う「かかわり方」とは、教育相談活動における重要な面接技法である。カウンセラーがクライアントに対して、どのような面接を実現するかによって、クライアントの変化動機（治療動機）を高めたり低めたりするし、さらにはクライアントの行動メカニズム（病理）の理解を進めることになる。この意味で、教育相談における面接技法は欠くことのできない技法である。ここでの面接特徴は心理的相互交流である。心理的相互交流とは、カウンセラーがクライアントに対し、クライアントの心的世界が浮き彫りになるような面接である。浮き彫りになったクライアントの世界はクライアント自身が気づく場合もあるが、カウンセラーによって指摘されて、その理解が深まる場合もある。クライアントが気づいたこと、分かったことをカウンセラーとクライアントが相互に交流し合う面接である。更に事例検討会ではクライアントの行動のメカニズムについて推察し、治療のための仮説（診断）を立てることも可能であるし、大切な検討課題の一つでもある。クライアントの問題解決のための治療仮説を立案するためには、いくつかの人間理解のための学説が活用される。

本研究においては、特にカウンセラーとクライアントとのかかわり方について検討するとともに、より効果的な指導体制の確立を探索することを目的とする。

事例の指導過程の分析とその検討

事例 1：校内暴力・器物破損の中学生の場合

A 君は 4 名の同級生とともに校内暴力、器物破損、授業のエスケープ、喫煙を繰り返し、教師の指導に従おうとしない。A 君の父親は仕事の関係で他都市に単身赴任中で、家族は祖母と母親と兄の 4 人である。兄は高校 3 年生とのこと。A 君は 1－2 年時代は普通の生徒で非行はなかったが、2 年の 3 学期ころから行動に乱れが見られるようになり、3 年生になって、非行集団に参加するようになってから非行化が進み、激しい校内暴力や器物破損などの反社会的行動を示すようになったとのこと。関係の教師は何とかしなくてはならないと言うものの、これといった指導法が見つからず、万策尽きたという感じである。

A 君の生活経過

1 年生の時は普通の生徒で、教師の注意も聞いていた。2 年生の前半は保健室にもよく来ていた。しかし、3 学期ころから非行グループに参加するようになってから、言葉・態度・行動が急速に変化した。3 年生となって、上級生が卒業したこともあって、逸脱行動が激しくなった。教師が注意すると居直り、暴力的となった。2 時間目ころから登校し、好きな授業には参加するが、途中で下校して、町で遊び、再び登校するという状況である。

A 君の指導経過

- 某月某日：下級生の生徒と目があったことに立腹してグループの友人とともに教室の机を破損する。生徒への言いがかりに注意した教師に対しても反抗的になり、暴言を浴びせる。
- 某月某日：午前の授業時、発熱を訴えて保健室に来る。摂氏 37 度ほどの熱があり、大事を取って家に帰って休むように勧める。A 君は教師の指示を素直に受け入れて、帰宅する。
- 某月某日：3 時間目のテストを受けないで、友人とともに保健室に来て、話し込んでいる。テスト中ではないのかと、養護教諭が注意を喚起しても教室に行き、テストを受けようとはしない。養護教諭が教室に行くようにと厳しく言うと、ムッとした顔で、保健室を出て、町にいった。午後から再び学校に帰って来た。
- 某月某日：3 時間目に保健室に来る。しばらく在室していたが、養護教諭に何も言わないで、教室に戻る。午後、再び保健室に来る。養護教諭がどうかしたのと声をかけたら、何でもないと言って教室に帰り、英語の授業を受けている。
- 某月某日：生徒間のトラブルに加勢し、喧嘩を買ってでる。
- 某月某日：身体計測の時にいさかいを起こし、自転車で室内を走る。
- 某月某日：生徒間で暴力沙汰を起こす。
- 某月某日：右手を打撲し、湿布してほしいと言って、保健室に来る。どこで打撲したのと聞くと、体育の時間にくじいたのだと言う。
- 某月某日：授業に参加せずに、廊下を歩き回る。
- 某月某日：恐喝事件を起こす。
- 某月某日：修学旅行で、他校生とトラブルを起こす。
- 某月某日：修学旅行中に教師に反抗し、教師に暴力を振るう。
- 某月某日：暴力事件を起こす。
- 某月某日：ゴミ箱に爆竹を投げ入れ、ゴミ箱を燃やす。
- 某月某日：喫煙現場を保護者に見つかり、指導を受けると、暴言を吐く。

○某月某日：学校の入り口で喧嘩をはじめ、シャツを血だらけにして保健室に来る。

○某月某日：友人が喧嘩して殴られたと聞いて、立腹し、相手側生徒を呼出に行こうとして、教師とトラブルを起こす。

上記の指導経過は3か月間の出来事である。3か月間の初発月が4月であり、新学期始めのためか、エピソードが非常に多い。3か月目の6月は2件のみという状況である。

以上の指導経過が報告され、指導者として今後どのように指導すべきかとの問いかけが行われた。これに対して参会者（約20名の教師）から多くの意見や考えが披瀝された。その内の主たる見解について紹介しよう。

- (1) 指導の難しい生徒のように思われるが、教師は困っていないのではないかという発言がある。これに対して、報告者が追加発言を求めて、教師側は困り果てて、問題のある生徒を自宅待機にするように検討中だと発言する。これに対して、参加者から賛否両論の発言があり、議論は白熱した。自宅待機が生徒にとって指導なのかという見解と、他の生徒の授業を進めるためには、こうするしかないのだという見解に分かれた。教師が困っていないのではないかという発言は、クライアントの行動が次々と報告されることから、参会者が事件に圧倒され、教師側の働きかけが感じられなかったものと推察される。また同時に報告者の報告がクライアントの行動報告を中心に行ったので、指導者の動きが背景に埋まってしまったのではあるまいか。
- (2) A君のような生徒の通学する学校の教師はその指導に手を取られて、振り回されて、何もできないというのが現実である。これに対して、保護者が悪いのだ、社会が悪いのだと言って嘆いていても仕方ないので、現状の中で、この生徒の指導のために何かできることはないかという点に問題を絞って検討しようと言うことになった。糸口として、どの教師ならA君と話し合うことができるだろうかとの質問に対し、報告者は養護教諭が適任と言う。どの程度の交流ができるのかとの質問に対して、「何かにつけて、保健室に来る」と言う。本事例を事例検討会に提案したのは養護教諭であり、心密かに自分が指導したいと思って、事例検討会に提案し、指導のための糸口を理解したいと考えてのことと思われる。
- (3) A君が保健室には来ると言う情報を手がかりとして、養護教諭によるA君の指導はできないのかと検討を開始した。報告者によるとA君は保健室に度々顔を出すのだが、これまでは保健室に来室すると怠惰とみなされ、来室することを否定されていたが、これに対して、A君の保健室来室を積極的に進め、A君の来室の機会を利用して、養護教諭がA君とカウンセリング関係を形成するように努力することができないのかと考えた。養護教諭がA君と度重なる話し合いができるならば、両者間に気持ちや感情交流が可能となり、相互理解が深まることになる。
- (4) 例えば前述のエピソードの中で、A君が発熱すると言って、保健室に来ている。この時、養護教諭が体温を計って、微熱を発見し、処置として自宅に帰って養生するようにと指示し、A君は指示に従って、帰宅しているが、この時、熱を計りながら、さらには、熱を測定した後でも、椅子に座らせたり、ベッドに休ませたりして、A君と雑談（説得したり、問題点を指摘したりはしない）をする。例えば熱があっても、雑談できるだけの力がA君にあれば、家に帰って休んでいるよりも、養護教諭と話し合う機会にすることが大切と考える。
- (5) 例えA君と雑談を通しての相互交流が可能となっても、すぐにA君の暴力行為が終わると言うものではないが、養護教諭との交流が深くなるにつれて、少しずつ、逸脱行動が減少するものと期待される。この方法は決して速効性のあるものではなく、多くの時間を必要とするが、確実に納得いく方法である。

- (6) 問題に苦しむ生徒が学校内で、雑談やたわいのない話しに応じてくれる教師を持つことは、生徒自身が自分の行動について考えるチャンスとなり、行動変化を誘発することになる。教師はその価値志向が「頑張る、粘る、努力する」という方向にあるために、クライアントの価値観（遊びたい、怠けたい、横着がしたい）が受け入れられず、クライアントに対して拒否的、否定的となることが多く、クライアントの受容ができなかったり、できにくかったりするのではあるまいか。結果として、教師は、クライアントに対して教訓的、説教的な言辞が多くなり、クライアントは余計に不安定となる。ここでは養護教諭が積極的なカウンセリング関係をクライアントとの間に形成することで、クライアントのための指導体制の糸口となった。今もし教師がクライアントの価値を理解し、クライアントの価値観を活用できるならば、クライアントの行動の再構成が可能となる。

事例2：不登校に苦しむ中学生の場合

K子さんは中学3年生在学中で、家庭には、両親に兄と本人の4人家族である。

欠席状況

小学校5年：100日余り

小学校6年：130日余り

中学1年：160日余り

中学2年：90日余り

中学3年：90日余り

K子さんの生活経過

小学校4年生のころ、某女と仲良しで、泊まりあう仲であったが、父が「泊まりあうような付き合いはするな」と言ったことがきっかけとなって、仲たがいとなり、学校に行かなくなったとのこと。これが契機となり、K子と父親との関係もまずくなったとのこと。小学校5年、6年と不登校が続いていたが、修学旅行にはY子さんが声をかけてくれたことがきっかけとなって参加した。修学旅行後、再び不登校が続いた。卒業式には参加した。

中学校での指導経過

報告者は中学校の養護教諭のため、K子が中学校に進学してからの指導について報告する。

4月（1年生）：入学後は、通学を渋りながらも登校したが、中間テストをきっかけとして欠席するようになった。保護者が心配して、連日のように担任教師に連絡をとったり、児童相談所、市教育委員会事務局の相談室などに相談した。しかし、相談効果は上がらず、不登校が続いた。

7月：市教育委員会教育相談室からキャンプに参加するように勧められ、参加した。

9月：K子さんの父親の申し出により、校長・担任教諭の了解の元で、養護教諭が指導を担当するようになる。養護教諭がK子さんの指導を引き受けるために、家庭訪問をする。本人が出てこないのので、母親と世間話をしていたら、犬が鳴きだした。「K子さん犬が呼んでいるよ」と声をかけたら、K子が部屋から出てきた。犬を含めて（媒体として）、K子に声をかけたら、犬の話の色々とするようになった。

担当者は犬の話ならできると悟り、犬の性格や芸について色々と話をする。1時間ほど話した後で、K子さんは私が何者か知っているかと聞くと、うなずいて、保健室の先生でしようという。よかったら保健室に話しに来ませんかと提案する。K子がうなずいたので、ではまた会いましょうと言って、帰ろうとすると、K子さんが犬を連れて、街角まで送ってくれる。担当者はこれなら関係ができるかも知れないと、かすかな希望を抱

いて帰る。

放課後、犬を連れて私服で登校する。保健室で犬の話しをして帰る。話しをして帰る時に、9月中旬の体育祭に参加しないかと提案したところ、参加しても良いと言ったが、結局は参加しなかった。休み明けの月曜日に家庭訪問をしたが、隠れてしまってあえなかった。体育祭に参加しなかったことが気になっている様子。その後、何度目かの訪問面接で、自分の不登校について、その原因や家族のことを話してくれた。特に兄と自分が比較され、自分が疎遠にされていると語る。

10月：教育委員会の主催した不登校生徒のキャンプに再び参加した。他校の生徒と知り合いになることで、世間が広がったためか、制服を着て登校するようになった。保健室を訪れたので、近くの鎮守さんに行って、キャンプの感想など色々と話をする。1時間半以上も話して、明るい顔で帰る。

キャンプで知り合った大学生がK子さんの心の支えとなり、K子さんも大学生を慕うようになる。養護教諭は週に2回の割合で家庭訪問し、登校刺激を与える。K子さんの機嫌を見て、ドライブに連れ出したり、鎮守さんに行ったりして、世間話を積極的に続けるようにした。

12月：保健室登校が多くなる。大学生との相互交流効果があり、勉強にも関心を示すようになる。勉強に興味を持ったのは、大学生の影響によるものと思われる。

1月：A子さんの積極的な勧めで某クラブに入部し、クラブ活動に参加するようになる。保健室登校も殆ど連日となり、養護教諭や他の数名（保健係り）の生徒と共に保健室で昼食を取るようになる。保健室ではT子さんがK子さんの世話をよくする。

3月：卒業式の時にはカメラマンとして、ビデオ撮影に協力するようになる。

担任教諭が転校することになったので、その文集作りを手伝うようになる。

終業式の日には教室に行き、最後の学級会活動に参加できるようになる。担任教諭のお別れ会にも参加して、先生を送ることができるようになる。

以上がK子さんの1年生の時の養護教諭による指導過程の概略である。K子さんは小学校5年時から、不登校が示されていたが、中学校に進学しても不登校はおさまらず、4月入学当初から不登校が示された。K子さんに対して初め担任教師が指導を手がけたが、不登校が解消しないので、9月から養護教諭が担任教諭と協力して担当するようになった。養護教諭が担当するようになったのは、K子さんの父親が小学校時に養護の先生に色々お世話になったとの発言がきっかけとなったとのこと。

養護教諭は初めてK子さんの家を訪ねた時に飛び出してきた犬をてなずけて、犬をK子さんとの関係作りの小道具として上手に活用している。犬の話を話題としてK子さんとの心理的交流を進めている。問題を感じて悩む生徒の指導を手がけると、多くの教師はいきなり問題に焦点化して、勉強が遅れるとか、出席日数が不足するとか、高校受験の内申書が書けないなどと言って、生徒を不安に追い込んで、生徒の不安をバネにして、問題解決を図ろうとするが、これは生徒の問題解決にはつながらない場合が多い。大切なことは、K子さんの場合のように養護教諭が、K子さんとの心理的交流ができるような関係形成に努力することである。本事例の場合、担当の養護教諭は、鎮守で話をしたり、車で話をしたりして、K子さんの気持ちを圧迫しないよう留意して、先生となら話をしようかという気持ちを作ることであった。養護教諭はK子さんとの雑談の中から、K子さんと父親との関係に緊張感があることを察知しているし、この関係が男子の父親と女性の娘との間に生じる複合心理的な感じのあることを察知している。教育委員会主催のキャンプに誘ったりして、K子さんの社会参加を促している。これは社会資

源の活用であり、同時にキャンプで知り合った大学生を活用して、K子さんの心理的成熟を促進させている。ここでの養護教諭はK子さんの指導のためのコーディネーター機能を發揮している。指導担当者がK子さんを独占的に指導するのではなく、色々と多面的な接近をはかり、K子さんの発達を側面的に援助したことが、K子の指導に大きく関与している。

4月（2年生）：入学式に某部委員として参加し、ビデオ撮影に関与していたので、2年生からは登校間違い無しと喜んでいたが、3日目から欠席がはじまり、再び不登校となる。新担任が家庭訪問を繰り返し、登校を促したが、効果は見られなかった。この間、教育委員会主催の合宿訓練（キャンプ）には参加している。

7月：養護教諭が友人（T子）にK子さんを誘ってくれるように依頼した。結果、T子さんがK子を誘い、T子さんの家に遊びに行くようになり、T子さんの誘いに応じて登校するようになった。夏休暇になるまで安定して通学した。夏休みにもキャンプに参加して、社会化の促進を図っている。

9月：新学期とともに登校するが、元気がない。体育の授業を休んで保健室に来たので、鎮守さんに行き、夏休み中のことや、家族のこと、友人関係などについて、ゆっくりしたテンポで話し合う。特に友人関係の中に異性の友人があり、女心を語る。10月末までは殆ど休まないで登校し、学習にも参加した。11月になってから、再び欠席が多くなった。K子は保健室に来談することが先生に迷惑ではないかと言うようになった。12月は殆ど欠席した。しかし、母親はK子が不登校になっても動揺しなくなった。学校は休んでも、登校して来ても、試験があっても、養護教諭とK子さんの面接は続いた。

年が明けて1月（2年生の三学期）：K子は年賀状を異性の友人宛に書いた。学級会活動で行われた一分間スピーチが思うように出来なかったといって養護教諭に抱きついて号泣した。悲しかったらしい。

2月：殆ど欠席する。

3月：登校するようになるが、不安定が続く。

4月（3年生）：周期的に不安定となるが、登校は続ける。不安定なので、医師に連絡、受診する。はっきりした指針はでない。

5月：修学旅行に参加するが、途中で不安定となり、保護者の迎えを受ける。旅行後、少しでも修学旅行に参加できたことにK子は満足している。

7月：不安定な状況が続く。

9月：登校、体育祭にも積極的に参加する。

12月：進路について悩む。

1月：やるしかない気持ちになり、安定して登校する。

2月：入試前再び不安定となる。2月11日、私立高校受験に合格する。

3月：公立高校を受験する。

本事例の3年間にわたる養護教諭の指導過程を養護教諭の目からの記録である。

ここでの養護教諭は徹底して、K子との心理的交流関係を作り、継続することに努力している。保健室で面接したり、近くの鎮守さんに行ったり、自動車を活用して、話の出来るチャンスを作っている。さらにK子が不登校となると家庭訪問を続け、週に2回も訪問したとのこと。さらに積極的に集団合宿への参加を勧め、何度か合宿に参加している。参加した機会に知り合った大学生にも協力を求め、適切な指導効果を上げている。同時にクラスの生徒の関与も時に応じて活用する。養護教諭は自分の立場で、社会資源をフルに活用しながら、自分は一貫して、面接を継続している。面接内容は、洞察的、訓育的なものではなく、日常の世間話に徹し

たとのこと。アイドルの話、恋の話、ファッションの話と淀みなく話は続いたとのこと。多くの場合、心理面接では、問題中心の話題が行われやすいが、事例によっては世間話中心の面接が有効であるし、関係形成がしっかりする場合がある。本事例の場合も、1分間スピーチがうまく行かなかったと言って、養護教諭に抱きついて号泣したということであるが、K子さんに取っては養護教諭は重要な心の支えだったのではあるまいか。

K子さんにとって、心の支えは親でもなく担任でもなく、養護教諭であったということは、養護教諭の日頃の面接が効果を発揮したものと推察される。

K子さんの場合が示すように、問題に苦しむ生徒を指導する場合には、その生徒の心の支え（援助者）の中心人物に誰になるかということである。チームで指導するということが取りざたされるが、その場合でも、だれが中心的援助者となるかが自然に決まることが大切である。

事例3：不登校に苦しむ中学生徒の場合

A子さんの欠席は60日余り、遅刻20日余りで登校が常でない。

家族は両親（共に40歳代）にA子を第一子として、弟2人（小6・1年）がいる。授業態度は真面目であるが、教科によって、出来不出来のムラがある。手先が器用で、絵を描くことが好きで、上手である。音楽コンクールでは伴奏者として意欲的に取り組む。自分の役割を自覚し、正義を貫く気持ちが強い。潔癖で神経質で、清掃活動には積極的に取り組む。

本事例も「不登校生徒の相談」として、養護教諭から報告されたが、在来の不登校事例とは異なった特徴を示している。

養護教諭が一番注目しているのは、A子の目がうつろな感じで、人形の目を連想するとのこと。「疲れきっていると言う感じ」とのこと。

身体的状況としては、身長160センチメートル、体重50キログラム余であるが、皮膚疾患があり、常にどこかをかきむしっているとのこと。アレルギー鼻炎もあるとのこと。教師と目を合わせて話をしないが、話すことは論理的である。

本事例について、養護教諭は心身の状況について専門家の判断を求めている。その結果「精神面に留意して指導してほしい」と言われたとのこと。詳しくは面接過程で示す通りである。

面接過程

1年生の2学期ころから、頭痛、体がだるいなどを訴えて、保健室を訪れることが多くなった。初め養護教諭は身体的問題として対応し、公立病院小児科を紹介し、受診をすすめた。小児科医師からは、問題なしと言われた。しかし、A子さんの愁訴には変化が見られなかった。

養護教諭の親しくしている別の医師（小児科医）に紹介したところ、「学校の様子について問い合わせがあり、心へのかかわりを大切にしてほしい」と言われたとのこと。

始めは担任教師が指導に当たっていたが、身体的に症状があるという理由から、養護教諭の援助を求めてきた。2学期後半から養護教諭もかかわるようになった。前記のように知り合いの小児科医師に紹介し、A子さんの指導について医師としての助言を求めたところ、A子さんの心にかかわってほしいという助言があった。

以来、養護教諭は一貫して、A子さんと面接中心の指導に努力した。

A子さんが「授業中、周囲の人がおしゃべりをする」と訴える、＜皆がよく喋るのですか？＞、「はい、みんなが喋ること事態、そんなに気にならないのですが、人の悪口ばかり言うので嫌になる」、＜そう、皆が人の悪口を言うのが嫌になるのですね＞、「そうです。人の悪口ばかり聞いていると、せつない感じになるのです。人の悪いところばかり見ないで、少しはよいところを見ればいいのにとと思うのです」、＜そうですね、あなたは人の良いところを見た

いのですか、なんで?」>、「そうですね、私は親から何時も欠点ばかり、指摘されているからでしょう、<なるほど、あなたは親から何時も欠点ばかり指摘されて、苦しんでいるのですね>、「そうです、祖父母は共に教育者で、両親は高学歴（父親は研究職）です、欠点ばかり指摘して、気持ちが休まる時がないのです」、<そうですね、両親は貴方のためを思って、欠点を指摘されるのでしょうか、聞かされる貴方は大変なのですね>、「そうです、朝から晩まで、親にあうたびに、鋭い指摘（矢じり）が飛んでくるのです。もう私は疲れきっているのです」、<そうですね、それはつらいことですね>、「はい、ですから、学校でも家でもイライラがつり、弟に当たり散らしたりするんです。悪いとは思いますが、つい一番下の弟に手を上げたりするんです」、<なるほど>、「H市にカウンセリングを受けに行っているのですが、殆ど意味がないように思うのです、家の体制に変化がないのですから」、<そうですね、なるほど>、「自分はカウンセリングを受けても意味がない、自分より親の方が受けた方が良く思うのですけどね」、<なるほど、貴方には原因や要因がよくわかっているのですね>、「そうです、わかっているけどやめられないのです」、<なるほど>。

A子さんの場合、家庭的に上昇志向の強い様子で、祖父母（近くで別棟の家に住む）・両親ともに高学歴で、社会的地位も高く、A子さんに対しても、それだけに期待が大きく、またA子さんもそれを引き受けようとしている感じである。A子さんにとっては恒常的な緊張感があり、気が休まる時がないと言う状況にある。

2学年に進級：担任教師が変わる。担任教師がA子さんに面接しようとして、電話をしたり、家庭訪問をしても会ってもらえず、養護教諭に援助を求めてくる。

養護教諭が家庭を訪問し、母親に面接する。理性的な方で、ものわかりもよく、非の打ちどころのない受け答えが返り、<本当にそうですね、そのようにお願いします>と言って帰る。母親は、はっきりして、しっかりした考えで、A子さんの言う母親イメージとは大きく異なる感じがする。世間体を大事にされる感じを受ける。しかし、そのことも母親には分かっていて、世間体を気にしないような生活が必要だと強調する。<何も言うことなし、結局、母親の気持ちが理解できないままに、>という感じで帰ってくる。

2学期：担任教師と共に家庭訪問をする。母親と今後のことについて相談の結果、金曜日の午後4時から面接に訪問することになる。

(1) 定例の金曜日訪問：始め母親が応対する。A子さんにあいたいと願って、A子と面接する。卓球のこと、ピアノのことなどについて話す。さらに祖父の口ききで私立高校の卓球部の生徒と練習していると言う。<何故、私立高校に出入が出来るのですか>、「祖父が私立高校に関係しているからだ」と言う。<そう、それで、力量はどうなの>と聞くに、「五分で行ける」と言う。<すごいですね>と言う。

卓球の話をする時には目が輝き、楽しそうに話す。特にラケットのことについては詳しく、色々情報を持っている。<すごいね>と言うと、嬉しそうな顔をし、始めて中学生らしい顔を見たような感じがした。

「印象理解：定例の面接に入る前にA子さんと養護教諭は何度か面接している関係もあって、相談担当の養護教諭とA子さんとの関係はスムーズな交流が行われる。卓球の話になるとA子さんは元気になる。祖父の援助で私立高校の卓球部と一緒に練習出来るという恵まれた(?)状況にある。このことがA子の成熟に取って有効であるかどうかは今後の問題である。」

(2) 定例の金曜日訪問：家庭のことを詳しく語る。今は考える時間がほしいと言う。部活動のことで、他の部員から電話がかかり、練習に参加しないかと言う誘いがある。保健室になら

行けそうだと言う。＜自分でどうするか決めなさい＞と言う。

数日後にA子さんが保健室に来る。保健室ではカーテン越しの隠れ室（保健室に来る生徒の自習室にしている）でA子は自習した。放課後は部活動に参加する。一週間後に卓球試合に参加する。

「印象理解：家族のことを詳しく語る。祖父母・両親共に高い教育を受けた方で、見識のある方であり、A子さんに取ってこの状況がメリットなのかデメリットなのかは今後の問題である。A子はこの家族の第一子であると言う事実を除外しては考えられない。A子の発達のための避けることのできないテーマである。」

- (3) 定例の金曜日訪問：家庭訪問をする。風邪を引いてしまって、卓球の練習に参加していないとのこと。「卓球の試合は勝てる相手に負けてしまって残念だった」と言う。「後で部活の先生に叱られたが仕方がないと思った」とのこと。

家庭訪問では、A子さんと話す時間よりも母親と話す時間が多くなる。

「印象理解：母親がカウンセラーに何か話したいのかも知れない。母親が口をはさむことが多い。A子さんとの面接では卓球のことを手がかりとして、学校に来ることができるようになるかも知れないと感じる。」

- (4) 定例の金曜日訪問：「風邪は良くなったが、今度は家族の者が次々と風邪にかかるので、また具合が悪くなってきた」と言う。ピアノの話し、歌のテストの話しなど、色々の世間話しに花が咲く。この結果、A子さんの表情に何かゆとりが見えてきたように感じた。

「印象理解：A子との面接時間が十分に取れて、カウンセラーもA子も共に安らぎを感じている。A子の表情に変化がある。これは面接における大きな変化である。」

- (5) 定例の金曜日訪問：母親の同席を断って、A子さんと二人となると、A子さんは堰を切ったように話しだし、こちらが口をはさむ時もないほどである。人間不信の話が多く、人が信じられないと言う。来週から父が外国出張するが、父の留守中、母親とのトラブルが心配だと言う。その時には保健室においでと言うと、ニコッとする。

「印象理解：母親の同席を断ってA子と二人で話をする。これは前回の面接結果からカウンセラーが考えた結果である。A子はカウンセラーに口を挟む余裕も与えないほどに語る。A子の内的世界には多くの話したいことがあるものと推量される。A子の心は語ることで、浄化されるのではないだろうか。」

- (6) 定例の金曜日訪問：父親の外国出張の話から、カウンセラーのアメリカ旅行の話になり、興味深く、話に花が咲く。映画の話になり、興味を持って聞いていた。面接の後半に母親との関係のことや、弟の関係についても詳しく話す。A子さんはカウンセラーとの関係を安心して持続出来るようになった。

「印象理解：A子とカウンセラーは父親の外国出張から、外国の話となるが、外国の話は夢と希望を代弁するものとなり、希望の面接となる。

これに刺激されてか、面接の後半は家族の深い話となる。カウンセラーはA子を見るA子の家族を深く理解することができる。」

- (7) 定例の金曜日訪問：母親が不在で、A子さんと二人で十分の話が出来る。学校に対する思いが詳しく語られる。A子さんが学校に対してこんなにも深く考えているのかと思い、驚くと共に深い感銘を受けた。

「印象理解：何か学校に対するA子の思いが多く語られる。A子が考える学校観を聴いてカウンセラーは感銘を受ける。」

- (8) 定例の金曜日訪問：母親と面接する。母親もA子さんから学校に対する思いを聞いている。

月に2回もH市に行って、カウンセリングを受けているとのこと。母親のみが行く場合が多いとのこと。A子は教育センターの電話相談を受けていると言う。A子は来年からは弟が同じ中学校に来るようになるので、心配だと言う。

「印象理解：ここでは母親と面接する。母親もA子から学校の話聴いていると言うことは、母親とA子との間に相互交流があったことを示すものである。」

- (9) 定例の金曜日訪問：年が明けたこともあって、進路のことが気になる様子。3学期は登校しようと言う気持ちもあるらしい。どのような進路方法があるかを知りたいとのこと。

最近、教育センターの主催する不登校の子どもたちの会に参加したと言う。そして自分の考えを話してみたとのこと。今の悩みは進路のことであるが、親と自分の希望が違っているので困るのだと言う。

「印象理解：A子が不登校から脱して登校するかどうかは別として、A子の生活は積極的な方向にあると感じられる。」

本事例は、祖父母・両親ともに高学歴の能力至上主義の家庭である。面接過程の中でも話題になるように、両親からA子に対しては常に否定的コメントが伝えられ、気の休まる暇もなく、緊張の連続と言う。これが裏付けとして、A子の生活には強度の強迫的行動や心身症状が示されている。本事例の相談担当者は養護教諭であり、専門医と連携をとりながら、訪問面接を続けている。9回の訪問面接の経過であるが、上記の面接過程の見本（エピソード）が示すように、面接過程ではA子の行動上の変化は殆ど示されていない。

事態に変化はなくても、A子とカウンセラー（養護教諭）との間は「相互交流の豊かな関係」となりつつあると考える。この関係はA子の長いライフサイクルにおいて計り知れない体験となることを期待したい。

一回目の面接で話題になったことは、卓球の話である。A子は卓球には相当の力量があるらしい。しかも条件的に恵まれて、高校生とともに練習できる状況にある。と同時に祖父の社会的地位はA子にとっては大きな重荷となることも現実である。

二回目の面接では、家庭の事情が語られるが、家族文化の期待する路線にうまくのれない子どものしんどさとその指導が大きなテーマとなる。

ここでのカウンセラーの心理診断（治療のための見立て）は「家庭的に祖父母・両親共に高学歴であり、高い社会地位にあるが、これがA子の発達にとって大きなストレスとなっている。A子が治療面接を通して、家族的ストレスに対処できるようになること」がその目標となる。カウンセラーの心理診断には他の側面もある。それはクライアントの問題として苦しむ行動を解明するための病理的解明がある。

三回目から九回目までのA子との面接は回を追うごとにスムーズになり、A子との面接が積極的に続けられるとき、A子の発達は促進され、変化が見られるであろう。

考 察

本研究では、3つの事例の指導過程を詳しく紹介し、その指導経過について検討することを目的としているので、事例自身の問題に対する病理的検討が本研究の目的ではない。

事例1は反社会的な問題行動を示す中学生に対して指導者がどのように対処すべきかを問うものであった。困惑状態の指導者が困り果てて、事例研究会に事例を提案して、事例研究会に参加している同業参加者に助言を求めている。長期に渡って、定期的に行われている事例研究会では、事例1に示されるような指導指針に困った教師が、指導方法の糸口を発見するために、

事例を提案する場合がある。ここでは、事例研究会がかけ込み寺機能を担っていると言えよう。

提案された事例について、参加者全員が自由に討論し、多様な方策が提案され、検討された。事例提案者は多様な方策提案の中から提案者の所属する学校の状況と自己の能力に照らして、実行可能な方策を採用して実行し、問題に苦しむ生徒の指導に取り組むことになる。提案された方策は今回は6項目であるが、これらの方策を参考にして、何が出来るかを考えることが大切である。長期間の事例検討会を継続していると、事例1のような事例提案が多くなる。口こみで参加を希望され、困っている事例を提案し、何らかの指導ヒントを得る。

かけ込み的な事例提案者には学級担任が多く、深刻な顔付きで参加され、事例を提案され、他の参加者から多くのヒントを得て、指導に希望を抱き、明るい顔になって帰る場合もある。とは言え、得られた指導ヒントがすぐに効果を発揮できるかと言うと必ずしもそうではない。学校体制も大きく参与する。別の事例であるが、担当を引き受けた養護教諭はクライアントの指導に積極的に当たろうと希望しても、管理職や学級担任がクライアントが保健室に行き、養護教諭の指導を受けることを過保護と誤解して、保健室に行くことを制限される場合もあると言う。ここで大切なことは、学校体制の再構成と理解である。管理職の見識が大きく関与する。担当者はクライアントの指導だけでなく、関係教職員の理解をも推進することが必要な場合がある。本事例の場合は県立教育センターの教育相談部の協力を得て、学校体制の理解に成功し、クライアントへの援助がより充実されている。教え、導き、訓育するという傾向のある学校教育の中に教育相談活動を導入するためには粘り強い努力を必要とする。

事例2は、事例研究会に長期に渡って参加され、何度かの事例提案の経験のある教師で、事例対応についての能力のある方である。事例2の教育相談活動が示すように、ここでの指導者は多様な社会的資源・機会を積極的に活用しながら、同時並行的にクライアント自身も丹念な面接を続けている。しかも担当教師（事例提案者）が言うように本事例は3年間に渡る指導経過であり、その詳細な指導経過には、他事例の指導のための多くのヒントがある。例えば、前述したように、事例2では社会資源が十分に活用されているところが最大の特徴である。第二の特徴は指導担当の養護教諭の自由さ、柔軟性である。指導者の柔軟性は教育相談活動における基本条件と言っても過言ではない。ここでの担当者は社会資源、社会施設を縦横無尽に活用し、クライアントとの面接を継続する。

事例3の特徴は、指導担当者がクライアントと面接（カウンセリング）を継続することにある。まさに教科書通りのカウンセリングと言っても過言ではない。丹念に訪問面接を継続することは、どんなにかたくなクライアントでも心を開き、知らず知らずの内に指導者との関係の中で生活をするようになり、新しいクライアントの世界を形成するようになることが期待される。

事例3の指導者も長年の相談活動の経験のある教師で、問題に苦しむ生徒の指導の上手な教師である。

以上、今回は事例1・2・3の三つの代表的な事例を検討し、教育相談推進のために、指導担当者は何をなすべきか、何が必要なのかを検討した。事例は基本的にはケースバイケースと言えるかも知れないが、多くの事例を検討していると、そこにいくつかの共通項が浮き彫りとなる。

今回の研究では、教育相談活動における事例対応のための共通項を3つの代表事例を借りて検討した。教育相談活動における事例は基本的に個別的であるが、そこには個別を越えた共通性が伺える。

3事例の共通項は「指導者とクライアント間の相談関係の形成」である。指導者が第一に留

意することは、担当事例の重要人物（多くの場合、クライアントであるが、時にはクライアントの関係者の場合もある）と相談関係を形成することである。ここで言う相談関係の第一要件は、クライアントとその関係者が「この指導者なら、自分の問題の解決に手をかしてくれそうだ」と言う気持ちになることである。このためには相談担当者は創意工夫して、クライアントとその関係者がこの人に相談したいと言う気持ちにすること（治療動機を高める）である。クライアントの治療動機の高揚は、指導者が説得したり、説明して高揚するものではない、指導者とクライアントとが話し合う中で、高揚することを忘れてはならない。このためにはどんな事例でもクライアントが面接後、この人と次にも相談したいと言う気持ちが抱けるような面接を構成することである。これは言うにして安く、行うにかたしであり、カウンセラーの創意工夫が求められるところである。指導者が第二に留意することは、クライアントができるだけ多くのことを表現（言語表現したり、体表現したりして）することが出来るような関係を形成することである。クライアントの表現自由な関係の要は関係自体が自由感と弾力性を貯えていることである。第三の留意点は、指導者は面接毎に面接を総括し、その時点での作業仮説（心理診断・見立て）を想定し、次の面接で、チャンスを見て、関連質問を加えて、作業仮説の信憑性を確認し、仮説が間違っていたり、ずれている場合には、仮説の再構成が必要となる。

参 考 文 献

- 山本和郎・越智浩二郎 1965 治療関係スケールの再構成とその検討 臨床心理 VOL. 4 NO. 4 1-23.
田畑 治 1967 セラピストの治療的要因の因子分析 臨床心理学研究 第6号・第1号 31-36.
田畑 治 1968 クライアントの治療的要因の因子分析 臨床心理学研究 第7号・第1号 26-33.
内田桂子・村山正治・増井武士 1978 カウンセリングにおける関係認知の分析 九州大学教育学部心理教育相談室紀要 第4号 80-106.
岡 秀樹 1990 「気づき」の治療的意義の再発見 心理臨床学研究 VOL. 8 NO. 2 20-31.
鈴木聡志・小林正幸 1990 半記述的チェックリスト法および多変量解析法による思春期登校拒否事例に関する研究(1) カウンセリング研究 VOL. 23 NO. 2 19-32.
鈴木聡志・小林正幸 1991 半記述的チェックリスト法および多変量解析法による思春期登校拒否事例に関する研究(2) カウンセリング研究 VOL. 24 NO. 2 28-37.
菊池陽子・生月 誠 1992 対人関係認知における「予測」と「結果の自己評定」が認知変容に及ぼす効果 カウンセリング研究 VOL. 25 NO. 2 37-42.
白井利明 1992 登校拒否児に対する青年・大人・教師の認知の違い 教育心理学研究 第40号 第1号 1-9.
【付記】 本論文は本学初等教育学科の秋山幹男教授に精読していただき、事例記述の問題点に付いて検討していただき、多くの助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

—平成6年10月6日 受理—